

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

| | |
|-------|---|
| 研究課題 | 明確な問題を持たない親子への子育て支援の方略の探索的検討 —小さな困りごと悩みと親への寄り添い— |
| キーワード | ①子育て支援、②親子、③発達の観点 |

研究者の所属・氏名等

| | | | |
|------------|--|-----|-----------------------|
| フリガナ 氏名 | キノ ヒトミ 木野 仁美 | 所属等 | 大阪千代田短期大学 幼児教育科 講師 |
| プロフィール | 保育現場での勤務を経たのち、大学編入や大学院在籍中にも現場での音楽療法の実践や発達支援、保育、スクールカウンセリングや地域の産婦人科での育児支援クラスの担当などの実践を重ねてきました。研究よりも実践のキャリアのほうが長いのですが、実践で取り組んできた発達支援を基盤に、「気になる子ども」「親子の関係」「音楽」「発達支援」を中心に研究活動に取り組んでいます。 | | |

1. 研究の概要

これまでの「子育て支援」の先行研究に多く見られるのは、明らかに支援を必要とする親子に対する事例検討や、明らかな支援の必要性はないが「育児不安」の解消や予防に対しての検討が多く、親が健全に役割を取得し実行できることを目指す支援について検討されてきている。筆者は心理職としての相談支援だけでなく、地域の産婦人科で、心理職、音楽療法士という立場に加え現場での保育経験をもとに「音楽遊び」を用いた統制された時間と、保護者がフリートークする統制されていない時間を組み合わせた、定期的な子育て支援クラスでファシリテーターを務めてきた。「健やか親子 21（第 2 次）」では子育て支援の課題として、「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」や「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」などが挙げられている。出産の際に、お産にトラブルがなかった、また産婦に目立った精神的な問題はなく、赤ちゃんに先天性疾患や障がいがない、特に家族の関係性にも問題がみられないといった場合は、「普通」の親子として扱われ、「切れ目のない」とは言え、やはり 4 カ月健診や後期健診、1 歳 6 ヶ月健診、3 歳児健診と支援の場との接触に間隔があき、多くの人に空白の期間が発生する。年々、仕組みの充実は図られており問題の早期発見や障がいや疾患への早期治療、早期療育にはつながりやすくなってきたが、大きな問題の予防という観点が強く、小さな困りごとや疑問に十分に対応できるとは言い切れないと考えられる。

このような視点から、本研究では筆者がこれまで行ってきた「音楽遊び」のフリートーク場面の言葉に注目し、保護者が困り感を話す時の言葉と、子どもの年齢との関係性について明らかにすることを目的に、テキストマイニングによる分析を行った。具体的には、「音楽遊び」で得られた日誌記録の中から、保護者の子育てでの困り感の言葉や、疑問の言葉を抽出し、それらについて KHCORDE 3 を用いて言葉の背景にある事柄の検討を行った。

2. 研究の動機、目的

筆者はこれまで地域の産婦人科の子育て支援のクラスや保健センターや小学校の心理職として、特に明確な問題を持たない親子から、問題に対し支援を必要としている親子ら、乳児から児童まで幅広い年代の親子に関わってきた。支援を必要とする親子への支援については、支援方略や窓口は充実に向かって日々進歩している。しかし、個別に支援を必要とする親子は園

や学校単位でとらえた時にはそう多い人数ではなく、大多数はいわゆる「普通」ととらえられてきた親子が占めている。では、「普通」ととらえられてきた親子に本当に何も問題がないと言い切れるだろうか。その点は「育児不安」という言葉で古くから多くの先行研究が行われてきた。牧野(1982)によれば育児不安とは「子どもの現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然として恐れを含む情緒の状態」とされている。その「育児不安」の状態に対してのサポートについてもこれまで多くの研究がおこなわれている。中山ら(2014)の研究では「子育て不安感・負担感子どもに対して感情的に叱るなどの行為と関連し、それに対して保育相談支援は、母親の育児不安や育児負担を軽減するなど、育児感情にプラスの影響を及ぼす」ことが示唆されている。渡辺ら(2017)は、「知識をたくさん詰め込むようなことは必要ないが、心理学的視点を入れた発達段階ごとの重要な知識を持つことで、不安やストレスを低くするという緩和の効果が期待できる」と述べている。

これらのことは筆者が親子とかがかわる現場で経験的に感じられてきたことであり、子育てを支援する立場からすれば当然と思われる内容のことであったとしても、保護者にとっては子どもの行動の理解への大きな助けとなり目の前の問題を打開していくきっかけとなりうると考えられる。そして、実際に問題を打開していく姿を目にすることは多くあり、軽微な問題であれば知識によって自身で解決する力を得ていくことは可能だと考えられた。また、子育て支援のクラスの活動の中では単に知識だけではなく、具体的に親子に遊びを提案し、活動を行いながら、目の前で繰り返される子どもの行動を発達の観点からその場で読み解き解説し、かかわり方などの提案を行うことで、保護者にとってはより理解しやすい場面となることも考えられる。しかし、これらのことは経験的な視点にだけにたよるものであり、これまで学術的に経験をまとめることができていないことが筆者自身の大きな問題点であり、大きな課題である。そして、このような現状は、子育て支援に関わる保育や母子保健の現場でも同じようなことが言えるのではないだろうか。

これらのことを踏まえ、本研究では「子育て支援」を標榜する場に対して保護者は子ども理解のためのどのような情報を求めているのか、また、その情報があることは保護者が主体的に子どもに向き合う力にどの程度なりうるのかについて明らかにするため、保護者の言葉から、困り感に関わる言葉や、疑問の言葉を抽出し分析を行った。

3. 研究の結果

【分析の対象】

A市B産婦人科小児科において筆者が担当した子育て支援のクラス「親子音楽あそび」への参加者の自由遊び時間の保護者同士での会話を中心とした子育てに関するつぶやきの記録から分析を行った。「親子音楽あそび」の子どもを対象年齢は、クラス①が6ヶ月から1歳(歩行ができるまで)、クラス②が1歳(歩行ができるようになったら)から、幼稚園・保育所への就園までの2クラスで、それぞれのクラスが月2回10:00~12:00に活動を行っていた。前半の10:00~11:00は音楽あそび、後半11:00以降は自由遊びで、随時退出可としていた。

対象者の子どもは、6ヶ月の乳児期からの参加が大半を占め、一人の子ともあたり就園までの平均2.3年間に平均28回の参加であった。最長で4歳4ヶ月までの参加者や、第1子から第2子までの約6年間にわたる参加者もあった。対象とした記録は、2005年4月から2018年3月までの80文書を対象とし、個別の相談であった内容については分析対象から除外した。

【結果と考察】

保護者のつぶやきの記録から頻出150語を抽出した。それらの語を元に「発達」「身辺自立」「自我の芽生え」「人見知り」「教育」「困り感」でコーディングを行い、単純集計と対象となるクラス別でのクロス集計を行った。これらの分析にはKHCorde3を使用した。単純集計を表1、クロス集計を表2に示す。

まず「発達」について80文書中の28文書に含まれており、35%を占めていた。一方でクラス別のクロス集計では、いずれのクラスでも14文書に出現しており、その出現に差は見られなかった。「発達」に含まれる語は発達、育つ、言葉、遊ぶ、遊び、知る、歩く、月齢、発達相談、年齢、歳、同年代である。一つ一つの文書では、子どもが年齢相応の言葉の出現や運動ができていないのか、適した遊びは何かといった内容が多く、いずれの年齢に偏ることなく関心が

寄せられているということが考えられた。

「身辺自立」は、80 文書中の 14 の文書が該当した。クラス別のクロス集計では、1 歳以上のクラスでの 12 の文書が該当し、 χ^2 検定での有意差が見られた。「身辺自立」に含まれる語は、トイレ、おもらし、おしっこ、大便、片付け、幼稚園、トレーニング、パジャマ、服が含まれる。1 歳以上のクラスの文書の中では、就園を見通しての会話の記録が多く、親は子どもが自分で身の回りのことができるようにしつけなければならぬと考えていることがわかる。対して、乳児期である 1 歳までのクラスはお世話の時期であるため、該当しなかったといえる。

一方で、「人見知り」については、有意差は見られなかったものの、80 文書中の 15 文書のうち、10 文書が 1 歳までのクラスでの出現であった。「人見知りが始まって、近所の人にも泣くようになった」ことや「ニコニコしてかわいいと言われていたのに、急にいろんな人に対して泣くようになった」などが挙げられている。人見知りは子どもによって表れ方や程度が異なるが、気になりはじめる時期は乳児期に多く、それは子どもの発達に伴う変化であっても親にとっては急な変化で、初めての子どもの場合には困り感につながると考えられる。

表1 コーディングの単純集計

| | | |
|--------|----|--------|
| 発達 | 28 | 35.00% |
| 身辺自立 | 14 | 17.50% |
| 自我の芽生え | 12 | 15.00% |
| 人見知り | 15 | 18.75% |
| 教育 | 9 | 11.25% |
| 困り感 | 15 | 18.75% |
| その他 | 18 | 22.50% |
| (文書数) | 80 | |

表2 コーディングのクロス集計

| | 発達 | 身辺自立 | 自我の芽生え | 人見知り | 教育 | 困り感 | ケース数 |
|------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|------|
| 1～2 歳クラス | 14 (32.56%) | 12 (27.91%) | 9 (20.93%) | 5 (11.63%) | 5 (11.63%) | 10 (23.26%) | 43 |
| 6～14 ヶ月クラス | 14 (38.89%) | 2 (5.56%) | 3 (8.33%) | 10 (27.78%) | 4 (11.11%) | 5 (13.89%) | 36 |
| 合計 | 28 (35.44%) | 14 (17.72%) | 12 (15.19%) | 15 (18.99%) | 9 (11.39%) | 15 (18.99%) | 79 |
| カイ 2 乗値 | 0.122 | 5.268* | 1.535 | 2.356 | 0 | 0.592 | |

* $p < 0.1$

この活動においては、1 回あたりの参加者数が最大で親子 10 組で、少人数でのかかわりができる場であった。自由遊びとフリートークは、子どもが遊んでいる姿を目にしながらの時間である。ここで語られる内容に対しては、「今ここ」とその背景の日常を筆者が保護者と共有し、そして今保護者が知りたい情報を提供し、困り感を共有できる場面であった。それぞれ、子どもの年齢によって、困っていることや知りたい内容が異なっていて、親と子が共に育つ中での変化のあるものだということがわかった。

現在はインターネットや育児雑誌、乳幼児向け通信教育教材などからたくさんの情報がもたらされる時代である。しかし、それは発達について正しいことが書かれていたとしても双方向ではない。双方向であり、そして「今ここ」で繰り返される子どもの姿を元にしながら、発達心理学に基づく視点をもった内容で、保護者と共に子どもの行動を読みとり、発達する姿への理解を促していくことは、親をエンパワメントする可能性が高いことが考えられる。実際に、子どもの行動を「困った」だけではなく、他者からの発達の視点を持った情報提供があること

で、保護者の子ども理解の大きな助けとなり、多くの「普通」の子育てをしている人の軽微な問題であれば、自身で解決する助けとなるだろう。

保護者が子どもの年齢に沿ってどんな情報を必要としているのか、どんな情報があれば子育ての自信につながるのかということを理解する一つの材料として、保護者のつぶやきに含まれる語から分析を重ねることは、意義があるものと考えられた。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回分析したことを元に、保護者の知りたい情報に対して、保護者の知識としての子ども像への理解と、我が子に対する理解の乖離の有無と、それらへの理解と支援のニーズを検討、子どもの年齢に応じて効果的な支援について検討を行っていききたい。保護者と子どもは相互のやり取りの中で変化していく。この変化の中には、子どもの発達と、親自身のライフサイクルでの発達が相互に関係しあっている。その相互作用の在り方についても検討を行っていきことができると考えている。

「発達支援」や「子育て支援」は何か困難があるから行われる事柄と、その困難を未然に予測したり予防したりする事柄があるだろう。総合的な視点を持ちつつも、困難を未然に予測し予防する支援について、さらに踏み込んだ親子関係や子どもの対人関係が発達する様について探っていききたい。

5. 社会に対するメッセージ

本研究に取り組んで、さらに保護者への聴き取り調査や質問紙調査に取り組む直前であった1月末から2月初旬ごろ新型コロナウイルスの蔓延が懸念され始め、そしてあっという間に、私たちはこれまで経験をしたことのない日々に見舞われました。自粛生活から新しい生活様式へとわずかの間に私たちの日常が変化していています。研究活動においても、それは同様のことが起き、人と対面で協働して何かをすることも今まで通りとはいけなくなりました。この変化は当然子育てにも大きな影響を及ぼしています。地域での自然なコミュニティでの子育て環境が、時代の流れや働き方、暮らし方とともに変化して、子どもを育てるためのつながりを子育て支援という仕組みで支える必要性が求められ、様々な方略で取り組まれるようになっていくと時間が経ちましたが、これからはさらに変化し、子育て支援のあり方も今後また大きく変わっていくことが容易に想像されるようになりました。本研究で対象とした、「普通」の子育ての在り方も、大きく変わっていくものと考えられます。人との対面でのかかわりの制限が求められる中で、小さな困りごとや疑問への対応方法の在り方も、さらに深めていかなければならないのではないかと考えられます。

子どもの月齢、年齢によって保護者の関心や困りごとが変化するということは、保護者自身も発達しようとしているからです。より良い方向へ発達を遂げていけるように、新しい生活様式の中での新しい子育て支援のあり方について、親と子の相互作用の観点から今後は、研究活動を行っていききたいと考えております。